

**【尽きない神の恵みとあわれみ】**

今日の聖書本文箇所: 哀歌3章19-26節/暗唱聖句: 3章22節

説教者: 鄭南哲牧師  
(Rev. Jung nam-chul)

今日我々をお招きする聖書の御言葉は旧約聖書の25番目に出ている「哀歌」という御言葉です。この哀歌書は神様が預言者であったエレミヤを通して書き記されたので、エレミヤ哀歌だとも言われています。哀歌は名前通り、‘悲しい歌(エレジー)’という意味です。ヘブル語聖書では‘アイカ(Lamentations)’で、“ああ！と言う悲痛(ひつう)と悲嘆、衝撃、驚きの悲しみを表しています。実際注意深く読んで見れば、哀歌の書き出し1章1節で“ああ(悲しい)”という悲嘆(ひたん)にくれた言葉から始まっています。それは2章にも、4章にも同じく“ああ！”と言う言葉から始まっている事が分かります。なので、エレミヤによって書かれたこの聖書を哀歌だと名付けられたと思います。

このエレミヤによる哀歌は紀元前586年イスラエルの南ユダ王国の首都であったエルサレムがバビロンによって陥落され、破壊され、エルサレム全体が廃墟されてしまいます。それだけではなく、神の聖殿であったエルサレム聖殿さえも破壊され、神によって選ばれていた多くのイスラエルの民たちが捕囚として捕まれ、連れられる悲劇を実際見ながら、哀しみの中歌った内容であります。いったいイスラエルの人々たちにとってエルサレムと聖殿がどんな意味があったのでエレミヤからはじめイスラエルの民があればほど神の前で悲しく歌ったのでしょうか。

**＜イスラエル民にとって大切なエルサレム＞**

エルサレムとは‘エル(Jeru:都市、町、地域意味)+サレム(salemはSHALOM意味で平和の意味)なので、エルサレムは‘平和の町、都市(町、地域: vision of peace)’の意味を持っています。しかし、みなさんもよくご存知のように人類歴史上一番戦いや戦争が多い町がエルサレムであります。旧約時代はもちろん、新約時代にも、その後、このエルサレムは今日に至るまで紛争や戦争の中心の町だったので、AD70年にはエルサレムが完全に敗亡され、中世時代200年間も十字軍戦争の激戦地(げきせんち)となったところでもあります。今日中東の緊張と危機がこのエルサレムを中心になって展開されています。なので、今日イスラエルでは首都として当たり前首都エルサレムを主張していますが、あまりにも宗教、政治など関係でからまれているため中東やイスラム国からの猛烈な反対によりまだ国際的に認められず、国連ではテルアビブをイスラエルの首都としてみなしているところでもあります。

こんなエルサレムの町であります、イスラエルの民にいつから、どうやって重要になったのでしょうか。

エルサレムはアブラハムの時はモリヤという所でした。創世記22章1節以下によるとアブラハムがイサクをいけいえとして捧げるために三日間歩いてモリヤの地に行きましたが、第二歴代誌3章1節によるとここがモリヤの山頂(さんちょう)でした。ここでのちに聖殿が建てられます。ダビデが王権を確立して、このエルサレムを首都として定めた後、ここがシオンもしくはダビデの城と呼ばれ事になったのです(第二サムエル5:6-9)。

ダビデもここに葬られました。(第一列王2:10) エルサレムはダビデとソロモンの時代の首都であり、分裂王国以後南ユダの首都になります。そういうわけでエルサレムはイスラエルの一番自慢の歴史の都市であり、イスラエル民にとって信仰と精神がこもった故郷のようなところでした。400年間政治的首都であり、信仰と歴史の中心地としてイスラエルは存在してました。しかし、レハブアム、アサ、ヨアシュ王の在任(ざいにん)中、エジプトの王シシャクがエルサレムを攻撃し、聖殿と宮殿を略奪したことがあり、(第一列王14:25-26)その後、ここはたえず、攻撃の対象となりました。永遠に続きそうだと思われたイスラエルの人々たちにとって自慢のこのエルサレムの都市が自分たちの目の前で滅亡された事はあまりにも受け入れがたい大きな衝撃そのものでした。

**＜イスラエルの民に大切なエルサレム聖殿＞**

イスラエルの精神と歴史の自慢の町であったエルサレム城が滅ぼされると、エルサレムにあったもう一つ、神のご臨在を表しエルサレム聖殿もありました。神に礼拝し、祈れるところでしたが、イスラエルの民が信仰から離れ、高ぶりになると、自分たちのみが唯一選ばれた民族で、他の民族はみんな蔑んで見て、異邦人だと呼ぶ根拠と象徴の物だと思っていたエルサレム聖殿も滅ぼされてしまいます。

エルサレム聖殿は神の臨在を象徴する場所として、イスラエルの民の信仰と生活の中心地でした。ですから聖殿の建築はイスラエルの信仰歴史において一番大切なことでした。エルサレム聖殿が建築されたところは昔信仰の父と呼ばれたアブラハムがイサクをいけいえとしてささげようとしたモリヤ山でした。神様はご自分の聖殿を建てる事をソロモン王に任せました。以前第二歴代誌の時も教えられましたが、5章6節でソロモンはイスラエルの3万人を動員させて聖殿を建てます。そして外国の建築材を輸入して持って来るために15万人の異邦人の労働者を雇ったそうです(第一列王記5:15,第二歴代誌8:7-10)。

聖殿の内部の大きさは長さ60キュビト(約31メータ)、幅が20キュビト(10メータ)、高さが30キュビト(16メータ)で約95坪くらいです。外部の大きさは約400坪くらいの大きさです。この聖殿はイスラエルの民がエジプトから出てから480年、つまり、ソロモンが王になって4年2月に着工(ちゃっこう)しますが、この時が紀元前966年です。建築工事は7年間(第一列王記6:38)かかります。

この聖殿は単純な建物ではありません。イスラエルの民の信仰と生活の中心であったので、彼らの信仰と歴史と精神がこめられた礎(いすずえ)だったのです。ですから、何よりも神様の臨在を象徴するところだったこの神の聖殿のみは永遠に続くだろうと考え込んでいましたが、このエルサレムの聖殿がまさに破壊されるなんて信じられない悲しみと衝撃そのものだったに違いありません。

**＜イスラエルの南王国の敗亡の記録＞**

結局紀元前588年、バビロンがエルサレムに攻め上り、エルサレムの城を包囲します。バビロンが攻め上ってくる時はまさかエルサレムがほろぼされるだろうかと疑ってました。しかし、2年間エルサレムの城が包囲され、食料の供給(きょうきゅう)が中断されます。みなさん、一度考えて見て下さい。2年間食料の供給がないままだとどんなに飢饉(きげん)がひどかったと思いますか。飢えから避ける事ができ

ませんでした。どんなに深刻だったのか自分たちの子どもを殺して食べたと聖書は記録しています。ゼデキヤ王も結局エルサレムの城から逃げますが、エリコで捕まえて両目がえぐりだされ、バビロンへ連れて行かれます。結局紀元前586年エルサレムは陥落され、エルサレム聖殿は焼かれてしまったのです。いままで400年間イスラエルの民の信仰の中心地だったエルサレム聖殿も破壊されます。そしてイスラエルの民は捕虜として連れられて行きました。ユダ民族の精神的、柱(はしら)だったエルサレム城の滅亡と信仰の中心地だった聖殿の破壊は悲嘆と悲しみと恐ろしい衝撃になったに違いありません。結局エルサレム聖殿の城壁は崩され、エルサレムのすべての家々は焼きつきました。

哀歌はこのような凄絶(せいぜつ)なエルサレムの滅亡の姿を描いています。その荒廃(こうはい)を悲しんでいる聖書がエレミヤのこの哀歌です。人でのぎやかだったこのエルサレムの町がひとりさびしくなり(哀歌1:1),もはやしもべとなって苦役(くえき)に服(ふく)していると嘆いています。1章2節をみてください。

“彼女は泣きながら夜を過ごし、涙は頬を伝っている。彼女の愛する者は、だれも慰めてくれない。その友もみな彼女を裏切り、彼女の敵となってしまった。”民はみなうめき、食べ物を捜している。気力を取り戻そうとして、自分の子どもたちさえ食物として殺していると嘆いています。(哀歌1:11).若い女も、男もとりこになっていた(1:18)と言います。

### <その中哀歌を通して神が我々に伝えて下さるメッセージは何でしょうか?>

われわれにとっても大切な質問は、ある町の破壊と国も滅亡を嘆き悲しんでいるこの哀歌をとおして我々に与えて下さる神様のメッセージは何であるかなのです。もし、これが単純にある町の滅亡だけについて語っているものであるならば、これは単なるイスラエルというある国の歴史にすぎないと思います。しかし、この哀歌が聖書66冊に含まれ、我々の手に持たされていることはこれをとおして我々になにか教えようとする神様からのメッセージがあるからです。

#### 1. 神様の裁きがかならずあるということです。

今日エレミヤ哀歌でエルサレムの敗亡と荒れ果てた町を語り、美しかったエルサレム聖殿さえ破壊されたということは神様の裁きがどれほど恐ろしいことなのかを教えてください。しかし、みなさん、忘れてはいけない事は神様は決して残酷な方ではありません。神様は耐え忍びながら待っておられます。時には慈愛のときもあります。時には悟らせ、時には預言者を通してすすめ、戒め、時には悔い改めて取り戻す回復の機会をも与えて下さいます。しかし、神様が裁かれるとのかれる道はありません。どうしても聞かない時はつまり“挽回(ばんかい)する時”(第二歴代誌36:16)が過ぎたら、神様の懲らしめは始まります。神様は正しい裁き主です(申命記32:4)。

イエス様が再臨されると最後の裁きがあると思いますが、神様はこの地においても裁きながら我々に警告して下さる時もあります。

#### 2. 最後まで悔い改めない者に神様の裁きが下るといことです。

二つ目に、最後まで悔い改めない時は神様の裁きを受けざるを得ないと言う真理を教えてください。特に哀歌2章がその内容です。2章には悔い改めない者に対する神様の御怒りが裁きの根本の原因です。“御怒りで曇らせ、憤って打ちこわし。”という表現が1,2,3,4,6節に繰り返されています。2章の最後の21,そして22節にも“主の御怒りの日にのがれる者も生き残った者もいませんでした。”哀歌をとおして最後まで悔い改めない時は神様の裁きからのがれる事ができないことを教えてください。

#### 3. 神様のあわれみによって我々には救いと回復の希望があるということです。

最後にエレミヤ哀歌が教えるもう一つの大切なメッセージはこの絶望の場においてもかならず神様に希望があることです。これが今日読んだ本文の箇所です。19節、20節をみてください。“私の悩みとさすらいの思い出、にがよもぎと苦味だけ。私のたましいは、ただこれを思い出しては沈む。私はこれを思い返す。それゆえ、私は待ち望む。…”これは言い換えると、“私が味わったその苦しみと苦難は忘れられないが、しかしじっくり考えてみれば、その中でも望みはある。”という意味です。

#### その希望と望みの根拠はなんでしょうか。

22節以下です。“私たちが滅びうせなかつたのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。あなたの誠実は力強い。”

もっと大切なのはご自分の民に対する尽きない神様の哀れみです。未来に対する希望は尽きない神様の恵みと哀れみに基づきます。つまり、神様は永久に見捨てませんでした。我々には残っている望みがあります。それが主の恵みと哀れみです。‘恵み’という言葉はヘセードという言葉として旧約聖書によく出る単語ですが、神様の大きい愛、変わらぬ愛、尽きない愛という意味ですが、神様の愛の終わりが無いという意味です。

‘あわれみ’という言葉は愛情という意味です。23節の御言葉は主の恵みとあわれみは朝ごとに新しく、主の誠実は大きいという意味です。朝ごとに新しいという御言葉は移り変わりが無いという意味です。神様の約束はかならず施行されます。これがまさに誠実なのです。

私たちは神様との約束を破って罪を犯し、神様に不誠実でしたが、神様は約束に誠実です。神様はご自分の民を永久に忘れたり、見捨てたりしません。これはこの哀歌だけではなく申命記30章、イザヤ56-66章、エレミヤ30-33章、エゼキエル36-37章です。すでに述べ伝えられたことがあります。ですから、いつも主の御前で謙遜にあゆまなければなりません。神の尽きない恵みと愛のゆえに私たちが恵まれ、回復され、救われた事をいつも忘れてはいけません！

実際、エレミヤ哀歌は廃墟になったエルサレムに向かってただ絶望と悲しみだけではなく、神様の愛と愛情を持って記録された神様の御言葉です。この哀歌のメッセージは神様の裁きの目的が何であるかを明かすためです。つまり、ユダ民族が自分たちが犯した罪と過ちを悟らせることにより、神様に対する信仰から離れないようにとすることです。イスラエルの犯罪と繰り返される不従順こそが敗亡の原因である事を明らかにし、同時に神様の哀れみによる新しい希望と望みを与えて下さる事を約束して下さる今日の御言葉でした。

最後に今日の結論を表しているこの御言葉をこれからも心に刻みつつ、覚えていきましょう。ご一緒に読んで終わります。

“私はこれを思い返す。それゆえ、私は待ち望む。 22 私たちが滅びうせなかつたのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。 23 それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。 24 主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。 25 主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めたましいに。 26 主の救いを黙って待つのは良い。”(3:21-26) アーメン!